

書 評

関戸明子 著

『草津温泉の社会史』

青弓社 2018年5月 219頁 2,400円+税

本書は、2007年に上梓された『近代ツーリズムと温泉』につづく温泉地と観光をテーマにした著者の2作目の書である。これまで学術雑誌などに掲載された内容を中心に改めて一冊に集約した。

本書の構成は以下のとおりである。

第1章 草津温泉をめぐる自然と歴史叙述

- 1 草津白根山の自然史
- 2 開湯伝説と歴史叙述

コラム 草津白根山の火山災害

第2章 温泉の利用形態と管理方法

- 1 全国的な源泉開発の動向
- 2 共同浴場の変遷
- 3 引湯の技術革新と万代鉱源泉の開発
- 4 温泉の集中管理の仕組み

第3章 温泉を基盤とする地域社会の形成と変容

- 1 明治期の温泉地の改良
- 2 草津電気鉄道の開通と温泉街の変容
- 3 戦後復興から高原リゾート開発の時代へ
- 4 バブル景気から今日に至る温泉まちづくり

コラム 国立療養所栗生楽泉園の現在

第4章 旅行者の動向と場所イメージ

- 1 明治期から昭和初期までの入浴客の動向
- 2 紀行文に描かれた草津
- 3 一九五〇年代以降の観光入込客の動向
- 4 「旅」の記事にみる草津

第5章 描かれた草津／写された草津／格付けされた草津

- 1 描かれた草津
- 2 写された草津
- 3 格付けされた草津

終章 結びにかえて

- 1 男性客ばかりの時間湯
- 2 草津の歴史や文化を味わう

以上の構成をみれば、本書が草津温泉の発達史という体裁をとっていないことに気づくである

う。本書を通貫するのは【地域資源】、【地域社会】、【旅行者のテキスト】、【目的地と旅行者をつなぐメディア】という4つの大きな柱である。ツーリズムとはいわば人間の行動形態の一種といえよう。【地域資源】とは旅行者にとっては目的そのものであり、住民にとっては公共性・公益性の高い性格をもつ。【地域社会】とは旅行者を受け入れる側の社会である。また、【旅行者のテキスト】は旅行者の地域資源の捉え方と換言でき、【メディア】は旅行者と地域資源とをつなぐ媒介に値する。これらはまさにツーリズムを捉える際に不可欠な視点である。

本書は、近現代の草津温泉での地域社会のあり方を通観しながら、この地域で形成された歴史や文化の重層性を読み解くことをねらいとしている。また現在の草津温泉の景観がどのようなプロセス（景観の生成・維持・消滅・変容）を経て今に至っているのかといった点も射程に入れた。

このような軸で編まれた本書が対象とする時代は、概ね近世～現代までと幅広い。では各章の骨子を紹介しよう。

第1章では、草津白根山の地形や地質を概観し、火砕流台地が河川によって浸食されたために、温泉街は等高線が狭くなり、複雑に入り組む地形になったことが説明される。また草津白根山の周囲は硫化水素ガスの噴出地があり、当地はかつて硫黄鉱山が操業していた歴史がある。硫黄鉱山はその後閉山したが、新たな鉱床を求める過程で、1966年に高温の熱水が大量に噴出した。これを草津町が72年に掘削・開発を行い、万代鉱源泉として給湯が始まる。草津温泉の豊富な湯量の背景にはこの源泉の存在があった。また温泉地は強酸性の湯水を河川へ流すため、1964年以降、24時間絶え間なくアルカリ性の石灰ミルクを投入し、中和をはかっているという。

第2章では、温泉資源をめぐる管理方法の変化を説明する。日本の各地の温泉地は、自然湧出の温泉を利用した湯治場的な役割から始まっている。古来、温泉地では共同体で温泉の管理が続いたが、近代に入り、掘削技術の進歩等により人工的に取得した温泉に対する支配権が生まれると、

私有財産としての性格がそこへ付与される。前者はコモンズとしての温泉であり、著者にはこれをタイトルにした研究の蓄積がある⁹⁾。他方、後者は第1章で紹介した万代鉱源泉を指す。そもそも、草津温泉は高温・強酸性の湯であったため、熱や酸に強い塩化ビニルパイプの登場によって湯畑ポンプ所が開設され、高い土地にも湯を送出することができるようになったという。それは1961年以降であり、さほど古くない。草津の主要な源泉と旅館の分布を示した図をみれば、市街地では湯畑等を源泉として引湯されるのに対し、市街地の周辺の高原地域では万代鉱源泉を利用していることがわかる。市街地には住民に無料の共同浴場が1936年以前から11か所開設されている。一方、高原地帯にはホテルやペンション、保養所、リゾートマンションなどが位置し、共同浴場も開設されているが、市街地と高原地域では、利用源泉や開発時期の上で明確な差異があることに気づく。すなわち草津温泉地は、戦後、引湯技術と物質材料の進歩からその空間性を拡大させていった。

第3章では、明治初期の時点から現在までに草津温泉地にもたらされたいくつかのインパクトにより地域はどのように変容したのかについて説明される。インパクトとはまず電気鉄道の開通である。1915年には1591人であった草津町の人口は、1940年には7500人を超える。この背景には交通機関の整備によって入浴客が大幅に増加したことが指摘される。また人口増加と平行して、温泉宿数も伸びている。1910年には70軒台で推移していたが、1934年には134軒まで増加した。著者はこの時期を「療養目的の自炊客から、消費額が大きい保養・遊覧客へと客層を広げる途上」と位置付けた。次のインパクトは、スキー人気である。終戦後、鉄山採鉱や国鉄建設にかかわった多くの労働者が去ったこともあり、草津の経済は窮迫していたが、それを打開したのがスキー場開発であった。草津町主導で進んだゲレンデ開発などが功を奏し、最盛期の91・92年度は90万人を超える入浴客を見せている。興味深いことに90年代半ばまで、スキー場入浴客の増加が、リフト延長とパラレルに推移している。本書には記載されていないが、交通網の整備により、当時、首都圏からのスキー客は相当の数を占めていたであろう。インターネットなどが普及する以前に、首都圏などの

スキーヤーがスキー場のコース数やゲレンデ整備の状況を注目している様子が取られる。こうしたスキー人気も90年代後半からは下火になり、草津に限らず、多くのスキー場では様々な対策が講じられるのであるが、起死回生の策もないまま、2015年頃には草津のスキー場入浴客は20万人を下回っている。しかし、このスキーブームに乗じたことで、草津温泉は若年層も来訪する温泉地へとイメージの一新につながる結果となった。

ところで、スキー客の増加が今後も現実視されていた1970年代、当然、温泉街では、旅館の規模拡大と駐車場の確保が問題となっていた。そんな折に、先述した万代鉱源泉の開発も重なり、70年代以降、高山地区にはリゾートホテルやリゾートマンション、ペンションなどが立地し、大きな団体客に対応できる収容力を備えた「ニュー草津」がつくられることとなった。

以上のように、草津温泉地は地域にもたらされたインパクトによって、温泉地以外の地域資源の創出や温泉地の空間的拡大などがもたらされていることがわかる。

第4章では、温泉を訪れる人々の視点にたつて草津がどのように捉えられていたのかについて議論される。

7人の文人の紀行文が紹介される。明治期から戦前までの紀行文からは時代とともに草津に対する旅行者の捉え方が変化していることが示される。特徴的な文言を拾えば、明治・大正期の紀行文には「女などには向かない温泉」、時間湯は「軍隊的組織」、「客の待遇は依然として十七八世紀頃と変化なく」「不便」「治療を専門とする湯治客」といった文言が目にとまる。時間湯とは草津特有の入浴法で、①みんなでそろって板をもみ、成分を均一にして温度を下げる、②100～200回柄杓で頭部に湯をかける、③湯長の指示で高温の湯に3分間つかる。そして①～③を1日4～5回繰り返すのである。いずれの文人たちも時間湯に言及しており、懸命に湯治する人々の姿が草津を語る上で欠かせない要素であったと著者は説く。ところが、昭和初期の紀行文では「夏は避暑、冬はスキーに、常に客の絶え間がない」「今日の草津は療養の草津ではなく、遊覧の草津」「都会人には親しみやすい場所」「清澄」「高原の明朗さ」「女中のサービスも湯治湯式ではなく」とあり、時間

湯を「見るのも、草津の旅のよい土産」と表現され、軍隊的とまで表現された時間湯へも好意的な評価が与えられている。

つぎには旅行雑誌に紹介された草津について紹介する。特定の記事にみるのみではあるが、それでも草津は暗いイメージから脱却し、爽快さを感じられる温泉地へとイメージの刷新が図られている様子がみられる。今日もつづく「草津よいとこ一度は……」という歌を歌っての湯もみは「のんびり」「湯気」「旅」というイメージの高揚につながっている。

第5章では、草津温泉がメディアによってどのように表象されてきたのかについて、鳥瞰図、写真、ランキングから考察されている。まず、鳥瞰図では湯畑の末端に位置する打たせ湯を前面に、中央に湯畑、背後に寺社、遠景に白根山などの山並みを描く構図が定番であった。また1810～1938年間の鳥瞰図について、何が描かれ、何が捨象されたかを精緻にみれば、浴場については取捨選択が行われたこと、またハンセン病療養地であった湯之沢がハンセン病へのいわれなき差別や偏見によって描かれなくなることなどを指摘する。つづく写真資料では、絵はがきをおもに取り上げる。鳥瞰図のような架空の高い視点の設定ができないため、湯畑を中心にしたものと、やや高台となっている囲山公園から湯畑を見下ろしたような構図が定番である。しかし、中には明治期までの温泉地までの移動手段であった二人乗りの馬の写真、時間湯の情景などが絵はがきに採用されている。著者は、旅行者が自分の体験を写真として受信者に伝え、そして追体験して欲しいとの思いを読み取る。こうした写真からは当時の人々の旅先での意識を探ることにつながっている。

さて、鳥瞰図および写真資料をとおして、著者は草津温泉の近代化の一端にも目を向ける。微細な図像・事物を見落とさず、電線網や電柱の描写、旅館の高層化などを指摘し、草津温泉に到来した近代化の波を導き出す。このようなアプローチは鳥瞰図や写真資料の活用が「文書には詳細が記録されない具体的な歴史的景観の変遷をたどる」ことにつながることを示すものであった。

第5章の最後ではランキングから草津温泉を捉える。江戸時代から東の大関には草津が位置しており、それは明治期に入っても不動であった。と

ころが、昭和初期に行われた「日本新八景」選定のイベントは、投票形式でおこなわれたものであるが、ここでは一位の別府をはじめ、熱海、塩原、箱根が八景に選出され、草津は35位であった。この結果から草津温泉への人気が低調になったと判断するのは早計である。このイベントでは各温泉地での票集めや国定公園の選定運動との連動という政策的な影響も見え隠れすることが示唆されている。著者はこの結果を草津ではこうしたイベントへの関心が低かったことがランキングへあらわれたとみており、草津が「湯治場として療養を目的とした入浴客を安定的に確保していたため」と冷静な見方をしている。

近年、「観光経済新聞」が実施した「にっぽんの温泉100選」では2003年以降15年連続して、草津は1位を獲得した。この間、温泉の不当表示問題が発覚し、泉質へのこだわりが強まったことも草津の地位を押し上げた。草津の源泉はすべて自然湧出であり、自然湧出量としては日本一を誇るという。草津温泉が格付け結果で一喜一憂しない潔さはこのゆるぎない事実がもたらしているであろう。

終章では「結びにかえて」として、草津温泉地の観察場所や見学スポットなどが紹介され、まちあるき時に便利なだけでなく、地理学巡検なども想定した演出で本書を終えている。

最後に評者の私見を述べたい。本書の書評を書くにあたり、山村順次氏に代表される観光地理学関係の学術書を読み直したが、その上で気づくのは著者の関心が「観光」という人間の行動形態にあるというよりは、「地域」に重点があることである。管見では本書中に「観光資源」という用語は見当たらない。群馬大学で教鞭をとられている著者のまなざしには、地元住民としての視点をとるところどころを感じる。本書では草津温泉を「観光資源」として捉えられてはいない。先述のとおり【地域資源】、【地域社会】、【旅行者のテキスト】、【目的地と旅行者をつなぐメディア】という4つの柱は観光地理学の重要な分析視角である。しかし通読すると、草津温泉という地域が、近代化や戦争、交通網の発達、モータリゼーションなどの社会的波が押し寄せた際に、どのような対応をみせ、その結果、どのように変容したかという知見を得る。それは草津温泉が地域住民の公共性・公

益性の場としても役割を帯びていることを考慮してのことであろう。さらに本書は草津温泉を時間軸に沿って描写する方法を採用していないが、結果的には江戸時代から現代までの形成史としての側面が大きい。

著者は序章で「時の断面」というアプローチについて説明を加えるが、その直後に本書は「年代別にまとめるのではなく、主題別に考察する」と宣言する。一見、矛盾するような構成と思いがちになるが、主題別の各章の内容は時間という流れの中で捉えられている。このため、読者は草津温泉に関する主題別の「時の断面」を積み重ねていくことになる。こうしたアプローチは、結果的に社会史という枠組みにとどまらず、観光地振興へも近接する可能性を生む。山村順次氏は観光地理学の課題として「観光地域の自然・歴史・社会・文化などの諸相を総合的かつ動態的に究明し、よりよい観光地域づくりに資する」²⁾ことを上げている。さらに同氏は「観光地域づくり」には地域住民の前向きな姿勢が地域の景観・環境保全にとって重要であることを説いている³⁾。本書の視点はまさにこの課題への挑戦でもあったようにも思える。なぜならば、本書は時間軸の中で存在のあり方を異にする「地域資源」と、立場の違いによってとらえ方が異なる「地域資源」とその変容に着眼したものと要約されるからである。

ところで本書には図表が多用されている。正味の総ページ数は200頁超であるが、図は77点、表23点、写真は18点であり、図表と写真を合わせる

と118点となる。すなわち、1～2ページに図表写真1点の頻度で掲載されている。各章の要点をおさえるに、図表の役割は大きい。ただし誤解を与えないためにあえて付言すれば、各図表の作成に要した時間と労力は相当であったであろうと推察される例が多い。

この書は観光関係者の目に留まることであろうし、地理学の学徒にとっては分析の視点や鳥瞰図・写真資料などの活用の方法を学ぶ良書である。いずれにしても多くの方に読まれることを期待したい。

最後に2018年1月、本白根山が噴火した。噴火してから3日目までに、草津温泉へ宿泊を予定していた二万人超の予約キャンセルが生じた（本書より）。地域に与えたダメージは、経済的な損失のみならず、スキーや登山の可否など、この地域の魅力的な地域資源の持続性に影響を及ぼしかねない。一刻も早い本白根山の火山活動の終息を願うばかりである。

(渡辺理絵)

〔注〕

- 1) 関戸明子「コモングとしての温泉—草津における温泉の利用・管理の事例を中心に」（谷口真人編『地下水流動—モンスーンアジアの資源と循環』、共立出版、2011）、222-234頁。
- 2) 山村順次『観光地理学』同文館出版、2010、17-18頁。
- 3) 前掲2）、18-19頁。